
思い出 <鉄>

七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思い出 > 鉄<

【Nコード】

N2618B

【作者名】

七瀬

【あらすじ】

有り得る筈の無い独白、一人の男。一振りの剣の思い出

(前書き)

闇が支配する空間に目が慣れると、誰も居ない方角から声がした

短編第2作。

君。閉館時間はとっくに過ぎているのに、何をしているのかね？

警備員といった様子では無い。いや、元より今宵、この博物館に警備員は居ないか。

君が何者なのか、仮設は容易に成り立つが、それは私にとっても、君にとっても、どうでもいい話だ。

君と、君の時間が許すのなら、少し話をしよう。

言っておくが、この話に元より意味教訓などは無い。長い時を経たきた私だが、他の者の命を、有って然るべき権利を守る為に在った事は、只の一度も無いのだから。時にはその逆でさえある。

故に、この話を聞いている君へ、直接に伝えられる事は無い。

私のこれまでの人生の軌跡。その再現が、君の身の上に降りかかる事が無いよう願うばかりだ。

幸い、今は真夜中。君しか私の囁きを聞く者は居ない。

私の名は《タルワール》。

今から500年程前、インドで鍛えられた刀剣だ。

柄には宝石を、鏢には象牙を、刀身には輝く象嵌と見事な彫刻を施され、刀剣でありながら決して血を吸わぬ《装飾剣》として作られた私。

今でこそ、四方を硝子とコンクリートで囲まれた博物館の一室に収まり、その姿を訪れる者へと晒しているが、かつての私の居場所は、その時代の権力者の元だった。

私が生まれてから、長い時間が過ぎた。

人々の生活はよくなり、世の中も大分変わった。

今、人は争いの際にも私を用いることはしないだろう。個人間の殺意、ちよつとしたいさかい、戦争でさえも、もつと簡単で便利な道具が出来てしまったのだから。古ぼけた刀に用は無いのだ。

実際、私の《同胞》、刀剣として鍛えられた《タルワール》で、今も姿を留めている者は殆ど居ない。

多くはその欠片が残るのみである。純粹な武器としての価値を保ち続けた者は、只の一振りも居はしない。

私も、宝石が剥がれ落ち、象牙が磨耗し、刀身が折れたなら、存在する価値は無い。

その程度の存在なのだ。今のところその心配は無く、その点においては安心なのだが。

さて、君はどんな話をお望みかな？

今生きている者は誰一人として知り得ない、遠い昔の話かね？

それとも、私自身の話を、私を囲う硝子に据え付けられた金プレートに書かれている文章より、もう少しだけ詳しく知りたいのかね？

前者は簡単だ。500年、常に人の傍にいたが、結局何も変わりはしなかった。

生活様式や、言語や、信じる神は違ったが、根源は変わらなかった。これらについて知りたいなら、向かいにある聖人の像の所に行つてくれ。ゴルゴタで括り付けられた十字をまだ担いでいるくらいだ。

話は延々続きそうだが。

後者の話が聞きたいのかね？

そろそろ疲れてきたろう。その角に椅子がある。座り心地は保障できないが、ここまで持つてくるといい。

思えば生まれた時から、私の運命は決まっていた。

私を欲して血を流した者も大勢いた。時には元の持ち主が血を流すこともあった。

その繰り返しだが、私の運命だったのだ。

《裝飾劍》としての矜持が無かったと言えば、嘘になるだろう。強者の傍に居るのは気分のいいものだし、私はその性質から、戦場で朽ちるのを待つ事には成り得ないのだから。お望みならば、私を巡って人々が争う様を延々と語り、君達には私があたかも悲劇のヒロインのような、色を付けた説教話をしてもいい。

だが、私は私だ。

流れた血の量などは、金、権力とは比べるべくもない。

私はあくまでその副産物に過ぎず、それ以外の意味など持たないのだから。

故に、《同胞》達の事は、何一つわからない。彼らが何を思い、どのように在ったか。思いを巡らせ、考えようとしても、どうにも想像がつかないのだ。良くも悪くも、私は《同胞》とは違う。それは、君と君の《同胞》も同じだろうがね。

そうしている間にも時は流れた。時代が下るにつれて、私の持ち主が代わる速度も加速した。

血はますます流れ、私の生まれた国からは、ますます遠ざかっていった。

あとは、ご想像の通りだ。もはや私が出る幕の無い戦争。それで儲けたこの国が私を買い取り、私をここに飾ったのだ。

不満は無い。現代において、私の存在意義が最も誇張される場がここだ。

不満など、無い。

君の意に沿う話が出来なかったのなら、申し訳ない事をした。

かつての持ち主の名を幾つか上げてもいいのだが、聞き覚えが無い者が大多数だろうし、君もそれを望まないだろう。

帰るのかね？・・・私を連れて行くのかね？

ならば、今から君が私の持ち主だ。

ああ、言いはしなかったが、最初の仮説の通りだった。君は、泥棒なのだね。

すぐに別れる事になるとしても、今日、君と話ができて幸運だった。私が君に出来るのはもう、今後の君の幸福を祈ることくらいだ。

もう話しかける事もないだろう。さようなら、今日は私の話に付き合ってくれて、ありがとう。

(後書き)

1500字以内に出来ませんでした、無念。
前作、今作を読んでくれた全ての人に感謝。

あ、前作でご指摘がありました、あれは「神視点」です。語り手の描写には重点を置いておらず、多少の混乱があったため今作では語り手を固定しました。

当面は基本、鉤括弧を使わないスタイルで行きたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2618b/>

思い出 <鉄>

2010年10月9日23時17分発行